

〈研究ノート〉

## 社会進歩と人口の増減

原 剛

現代イギリス歴史学界の大家の一人であるホブズボームは、人類の歴史が進歩の歴史であった証として、人類発生以来の人口増加を挙げている。確かに数百万年前に類人猿と別れて進化の道をたどり始めた人類には、その生存を脅かす条件が周囲に満ちあふれていたであろう。最悪の場合には絶滅したとしても不思議ではない。しかし人類は絶滅するどころか、他の大型哺乳動物を圧倒して増殖してきた。

その圧倒的な増殖は、ホモ・サピエンスと呼ばれる人類の悠久の歴史のなかで、早い時代に起こったことではない。もし人類が発生当初から鼠算式に人口を増加させていったならば、恐るべき数に達したであろう。

大淵寛教授によれば、仮に現在の世界の人口増加率である年率 1.63% で人口が増加すると、427 年後に 1,000 倍、854 年後に 100 万倍、1424 年後に 10 億倍になるという。しかしそうはならなかった。旧石器時代の人口増加率は、1 万年あたり 3~5% だったと思われる。増加率がそのように低かったのは、言うまでもなく、多数の人間が成長する前に餓死したり病死したりしたからであった。それでも人間は食物採集と狩猟を共同で行うという方式を考案し、それによって食物を調達しながら何十万年かけて数百万人ないし 1,000 万人の人口に達していたと推定される。旧石器時代の食料調達の技術で地球上に生存できた人間の数の上限は、この程度だったであろうとされるからである。狩猟と採集のみで一人の人間が生存するためには、資源が普通にある数平方キロメートルのテリトリーが必要である。狩猟・採集に依存する人間集団は、人口が過剰になれば、環境の力で自然淘汰されることもあれば、自然淘汰の前段で人為的に人口の増加を抑制したかもしれない。

文化人類学者の小川英人は「狩猟・採集民の人口は…彼らの技術レベルで環境収容量 (carrying capacity) を超えない程度に、十分に安定したものとなっている。人口増加を抑えるために、さまざまな文化的装置 (嬰兒殺し、墮胎、性行為のタブー等) が用意されており、食料資源と人口のバランスが保たれている」と述べている。

その後の人類の増殖を、他の大型動物には比類のないものにしたのは、狩猟や漁労の道具の製作、原始的とはいえ、農業や牧畜による食料の生産、雨露をしのぐ場所の設置であった。これは

すべて人間が考案した技術の成果である。まさに人口の増加は、人間の生活技術の進歩、人間社会の進歩の証であった。

1 万年以上前に先のとがった棒で土を掘ることから始められた食料生産の技術は、次第に進歩して種々な農具を作り出し、犁つまり畜力を利用する耕耘機を作り出した。耕作面積は飛躍的に増加し、人口も飛躍的に増加した。飛躍的な人口増加は農業技術の進歩の証であった。

しかし農業による土地の人口扶養能力には限度があった。いわゆるマルサスの罠が待ち受けていたのである。利用可能な土地をほとんど利用し尽くした地域が収容できる人口には上限があり、人口が一定の規模に達すれば、それ以上の増加は不可能であった。もっとも一定面積の農地が扶養できる人口が農業の種類によって異なったことは、ヨーロッパの麦作農業地帯の人口密度とアジアの稲作農業地帯のそれとを見れば明らかである。アジアを旅行したヨーロッパ人は、自国と比べて非常に高いアジアの人口密度に接して、強い関心をもって人口を観察したにちがいない。マルサスが、嬰兒殺しはインドや中国で主に見られることだと書いたのは、彼らから得た情報によるものではないかと思われる。しかしミレイユ・ラジュは、18 世紀フランスでも、望まれない嬰兒が過失を装って人為的に殺されることが稀ではなかったらしいと書いている。

それはともかく、農業経済下ならば上限を画されたであろうヨーロッパの人口が、さらに増殖することが可能になったのは工業の発達のおかげであった。ハバカクも大塚久雄も述べているように、一定の面積の土地で生計を立てられる人口は、農業地域より工業地域のほうが多いのである。これは家内工業が盛んな農村についても妥当するが、とくに産業革命を経験したイギリスでは、18 世紀と 19 世紀に人口が激増した。ちなみにイギリスの人口は 18 世紀に 1.7 倍となり、19 世紀前半に 2 倍弱になった。ここでも人口増加は人間の進歩の証であるというホブズボームのテーゼが想起される。

しかし工業地域の人口扶養能力が農業地域のそれにまさると言っても、工業自身が食料を増産することによって、その扶養能力を増大させたわけではなかった。工業が発達することによって雇用が増え、工業地域の単位面積当たりの雇用機会が農業地域のそれより多かったので、より多くの人が生活できたのである。食料の自給が可能な一国経済において、農村に過剰人口が存在する場合には、工業部門が発展して農村の過剰人口を工業部門に誘因することは、その経済にとって有益である。しかしその後の発展過程において、その国民経済の工業部門が発展を持続して人口が増加し、他方、農業が発展しなかったり、その発展が工業の発展に対して相対的に非常におくれたりする場合には、食料の自給が困難になることが起こり得る。実際に 18 世紀末から 19 世紀初期にかけて、イギリスでは食料の需給状態が逼迫し、小麦の価格は、1750 年代の 10 年間の平均価格と比較すると、1805~1814 年の 10 年間のそれは 2.5 倍以上になっていたのである。さらに商工業が農村から過度に労働力を誘因すると、農村が過疎になり荒廃する恐れもある。最初の産業革命が一段落したころに、イギリスの文人ラスキンは、工業による農村の荒廃を憂えて、

20世紀の悪夢として、次のように述べている。

「リヴァプールのドックにマストが立ち並ぶように、ブリテン島全体に煙突がきっかりと立ち並んでいた。そこに牧場はなくなるであろう。樹木も庭園もなく、わずかに少量の小麦が建物の屋上に栽培され、蒸気力で刈り取られ、脱穀される。」

しかしブリテン島の農村はラスキンが憂えたほどに荒廃することなく、現在の日本人の眼から見ると、羨ましいほどに美しい景観を保っている。とは言うものの、イギリスの食料自給率は激減して、1914年になると、イギリス人が食べる食物の約60%は海外から供給されており、小麦にいたっては、イギリス人が食べるパンの材料の80%は輸入に依存するようになっていたのである。

18世紀と19世紀に爆発的に増加したイギリスの人口に食料を供給したのは、イギリスの農業ではなかった。エンゲルスは19世紀前半に、人口増加に関するマルサスの悲観論を批判して、「ミシシッピー川の流域が、そこにヨーロッパの全人口を移住させるほどに十分な未開拓の土地をもっているあいだ…人口過剰について論じることは滑稽である」と楽観的な見解を述べたが、その予測は、もっぱら移住という形によらなかつたとしても、少なくともイギリスについては妥当し、19世紀後半のイギリスはアメリカ合衆国の穀倉地帯から穀物を輸入することによって増加する人口に食料を供給したのであった。

イギリス一国の経済という視点に立つかぎり、マルサスの罫はイギリス人を待ちうけていなかったように見える。しかもアメリカの穀倉地帯における小麦生産コストはイギリスにおけるその10分の1であったから、イギリスが輸入穀物に対して高い関税を課してきた穀物法を廃止する法律を1845年に制定して、1846年から1849年までの経過措置を経た後は名目的な額の関税としたので、1870年ごろから外国産の小麦がどっと流入すると、英国産の穀物価格は、1874/75年から1892/93年までに、小麦が約60%、大麦が約46%、オート麦が約43%低下した。大西洋を隔てた遙かかなたのアメリカ大陸のしかも内陸部の穀倉地帯から小麦をこれほど安く輸入できたのは、輸送技術の進歩に負うところが大きであった。すなわち陸上においては鉄道輸送が馬車輸送よりずっと安価に穀物を運び、大西洋を横断する海上輸送費は蒸気船の出現で、蒸気船と帆船の競争の結果、激減したのである。イギリスの人口は、19世紀前半に2倍近く増加したにもかかわらず、技術進歩のおかげで19世紀後半にさらに2倍近くの増加を達成できたのであり、人口の増加は技術進歩の証であったことになる。

しかし産業革命を経験したイギリス経済が19世紀に成長したとはいえ、この爆発的な人口増加に対するマルサスの憂慮は、19世紀後半にイギリスの一部の識者の心を離れなかった。英語で言うハインドサイトで見れば、19世紀後半の人口増加率が1.9%で経済成長が1.8%だったのであるから、その憂慮は的はずれではなかったと言える。イギリス統計学会の報告で、ウィリアム・オウグルは、産児調節以外の方法でイギリスの人口が静止状態に変化する条件を求めた。そ

の結論は、従来なら結婚したはずの女性の4分の1が、生涯、独身を通し、残りの4分の3の女性が結婚の時期を5年遅らせるという非現実的なものであった。

ところがオウグルの憂慮は杞憂におわった。1870年以降に出生率が漸減し、1851年の出生率と比較すると、1911年の出生率は33%ちかく減少していた。出生率のその減少の重要な原因は、婚姻率の減少ではなかった。それも減少することは減少したが、1850年代と1880年代の差はわずかに0.2%であり、1871年と1911年の差は約6%であった。むしろ1851年から1911年までに33%ちかく出生力が減少したのである。ちなみにイギリス人の夫婦が20年の結婚生活の間にもうけた子の数の平均は、1860年代後期の結婚では6.16人、1870年代の結婚では5.3人、1890年代の結婚では4.13人、1915年の結婚では2.43人と低下した。1930年代には出生率と死亡率が接近して、一時は人口の絶対的な減少さえ危惧されるまでになった。

こうして、この段階における人口増加の鈍化は家族計画によるものであった。調査に答えた労働者階級の妻で家族計画を実行した者が占めた比率は、1831~45年に生まれた者の19.5%、1866~70年に生まれた者の42.7%、1902~1906年に生まれた者の72%であった。

家族計画を実行しつつも人口を増加させた社会の人口増加は、人間の進歩の証であると言えるであろうか。その答えは「然り」であろう。家族計画が実行される背景には、さまざまな条件が考えられる。まず第一に乳幼児の死亡率が減少したので、一家に従来と同じ数の子供が生まれると子の数が多くなりすぎる可能性がある。乳幼児の死亡率の減少そのものが人間社会の進歩の証であったが、一家のなかで子の数が多すぎることは、富者にとっては財産の分与の点で不都合であり、貧者にとっては、初等教育が普及し児童労働の機会と価値とが消滅した時代の子沢山は、単なる食い扶持の増加だけを意味するものではなかった。人々が可能ならば生まれる子の数を調整したいと思うのは当然だったであろう。しかし赤子の誕生の神秘的な側面だけを見て、その神秘をすべて神の摂理であると受け止める信仰が強かった時代には、子の誕生の人為的調整を考えるのは一種のタブーであった。妊娠と出産に関する生理的・医学的知識が進歩して初めて、子の誕生を人為的にコントロールしようとする態度が一般的に生じたのである。

さらに言えば、イギリスで一組の夫婦の間に生まれた子の数が19世紀後半に漸減したことは、この時期における消費水準の一般的な上昇を反映したのであった。しかし一般的な消費水準が上昇しても、その上昇の程度は1920年代までは、それ以前の人口増加の趨勢を変えるほどに家族計画を推し進めさせるものではなかった。1920年代と1930年代初めにかけては、第一次世界大戦の影響もあって、人口総数は停滞したが、1935年を過ぎると再び増加に転じた。要するにイギリスの人口は、社会の技術や消費生活や人間の知識の向上と進歩を反映しつつ適度に増加したのであり、人口増加は人間社会の進歩の証であったと言ってもよいであろう。

ところがイギリスの人口は1960年を過ぎると、非常に緩慢にしか増加しなくなった。1961年に約5,200万人であった人口は、1971年に約5,400万人、1981年に約5,560万人、1991年に約

5,600万人という具合である。20世紀後半の人口停滞の大きな理由は、人口の置き換え水準をかるうじて維持できるか、まったく維持できないほどの合計特殊出生率の低下であった。そしてそれはイギリスだけでなく、我が国も含めていわゆる先進工業諸国で軒並みに生じていることである。先進工業諸国の合計特殊出生率の低下の最大の要因は、女性の地位の向上にあると考えられる。

出産は、外科的大手術が誰にとっても恐怖の対象となるのと同様に、その経験のない女性にとって恐怖の対象ではないかと筆者は思う。ミレイユ・ラジュは、『出産の歴史』の中で18世紀フランスでは、農村の女性よりも都市の知的女性のほうが出産を大変なことだと考えると、書いている。先進工業国において、多くの女性が都市に住み、高学歴の女性が増えた20世紀末に多くの女性が出産に対して、18世紀フランスの都市の知的女性と同様な恐怖心を抱いたとしても不思議ではない。合計特殊出生率の減少の原因がすべてそこにあるとは考えないが、それも一つの重要な原因と考えてもよいのではないであろうか。さらに言えば、結婚が女性の生き方として最良の選択であった時代と異なり、女性が経済的に自立する機会が増大すれば、生涯、結婚しない女性が増加したり、女性の結婚年齢が高くなったりするのも当然であろう。また結婚生活においても女性の意見が尊重されるようになれば、肉体的に一方的に女性の負担となる出産の回数は、たとえゼロにならなくても、なるべく少なくされることになるであろう。

他方、結婚後の生活設計を深く考慮しないで結婚する若年の男性はさておき、多くの男性は高い生活水準を維持できる収入が得られるまで結婚しなかったり、生涯、独身を通したりする。この態度を、マルサスが *prudential choice* と呼んだところの経済的にゆとりある者による必ずしも品行方正な生活を意味しない趣味の独身生活であるにせよ、自分の経済力では消費の要求水準を満たせない者によるところの *moral restraint* とマルサスが呼んだ本意な独身生活であるにせよ、この場合に結婚を妨げているのは、社会の技術的進歩がもたらした高い消費水準である。

先進工業国においては、20世紀半ばまで技術進歩は人口の増加を可能にした。言い換えれば、人口増加は技術進歩と社会の一般的進歩の証だったことになる。しかし20世紀末になると、技術進歩の成果である消費水準の上昇や、出産に関する医学的・生理的知識の進歩、さらには女性の社会的地位の向上など、人間社会の進歩と言ってもよいものが、人口を停滞なり減少なりさせるようになった。換言すれば、いまや人口の停滞ないし減少が人間社会の進歩の証となっているのである。18世紀と19世紀には、工業化は限られた国で生じたが、いまや、つい最近まで「発展途上」にあるとされていた国や地域で起こり始めている。長い人類の歴史の中では数百年というタイム・スパンはあまり長期ではない。その中で工業化が地球全体に及び、地球上のあらゆる民族や地域の社会が進歩し近代化したとき、その進歩が人口動態にどのように反映されるのかは、興味ある問題である。